

「東アジアにおけるポストコロニアリズム」研究会

「見られる身体」としての（在日）外国人女性 —「植民地主義的まなざし」はいかに再生産されてきたのか—

李 里花

1. はじめに —「見られる身体」という視角

本稿は、日本社会において外国人女性に向けられてきた「植民地主義的まなざし」を、戦前期から戦後期、さらに今日のいわゆる「ニューカマー」期に至るまでの歴史的連続性のなかで捉え直す試論である¹⁾。ここでいう「植民地主義的まなざし」とは、女性を一個の自律的主体としてではなく、特定の文化や民族性を体現する「身体」として可視化し、その身体性や感情性を社会の欲望や不安を投影する対象として編成する権力構造を指す。

日本において外国人女性、とりわけ朝鮮人女性やフィリピン人女性に向けられてきた視線（以下、「まなざし」とする）は、彼女たちをしばしば「異文化の担い手」として固定化し、「エキゾチック」「妖艶」「感情豊か」といったイメージを付与することで、性的消費の対象として回収してきた。その過程において、女性たちの主体性や政治性は捨象され、彼女たちが置かれてきた構造的条件や不平等は不可視化されてきた。

ここでとりわけ重要となるのは、この「植民地主義的まなざし」が、個々人の偏見や一時的な差別感情の集積ではなく、歴史的に形成され、制度的・文化的にも支えられてきた構造的な力学として捉える視点である。筆者はこれまで戦前期日本において朝鮮人女性が大衆劇場の娯楽空間に組み込まれ、「疑似キーセン遊び」として消費されていく過程を分析してきた（李 2024a, 2025b）。そこでは、朝鮮人女性が「ジェンダー化された民族女性」として表象され、その民族性と女性性が結びつくことで、娯楽と性的消費の対象へと編成されていく様相を明らかにした。

本稿は、こうした形で形成されたまなざしが、戦後のキーセン観光、日本国内の韓国クラブ文化、さらにはフィリピンパブを中心とするアジア女性エンターテイナーの表象へと、形を変えながら継承・再編されていったことを指摘するものである。これら性産業の展開は、旅行会社による商品化や就労ビザ制度といった制度的枠組みによっても支えられており、個人的嗜好や娯楽の範囲に還元するこ

とのできない社会的・構造的基盤を有している。

2. これまでの研究と課題 —「植民地主義的まなざし」の歴史的連続性

しかし一方で、このような「植民地主義的まなざし」を、時代を横断する歴史的連続性のなかで体系的に捉えようとする視角は、これまで十分に展開されてきたとは言い難い。それは、研究蓄積が存在しないということの意味するわけではない。むしろ、関連研究は主に次の二つの研究領域において発展してきたといえる。

第一の領域は、朝鮮人女性を対象とする歴史研究である。帝国期に形成された植民地主義的ジェンダー秩序が戦後も持続していく構造を明らかにした先駆的研究として、金富子『継続する植民地主義とジェンダー』（2011年）が挙げられる。金は、朝鮮人女性を帝国支配の歴史的文脈のなかに位置づける視座を提示し、以後の研究に大きな影響を与えてきた。近年では、この蓄積を踏まえ、インターセクショナリティの観点から「朝鮮人であること」と「女性であること」の交差性を検討する研究も展開されている（朴金 2017、熱田・河・梁（永山）2020、李杏里 2022、鄭幸子 2024、他）。

さらに朝鮮人女性に注目した研究では、彼女らの主体性がエスニシティとジェンダーをめぐる支配と従属の関係のなかでいかに形成されてきたのか、朝鮮人女性の視点にもとづいた研究も発表されてきた。徐阿貴『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的公共圏」の形成』（2012年）は、夜間中学運動を通じて在日コリアン一世女性が教育制度からの排除に抗し、「下位の対抗的公共圏」を形成していく過程を明らかにしている。また、橋本みゆき編『二世に聴く在日コリアンの生活文化』（2021年）は、文化継承が単線的な支配—被支配関係のもとで行われるのではなく、世代差、階層、貧困、家族内ジェンダー関係といった複合的条件のもとで営まれていることを示した。韓東賢『チマ・チョゴリ制服の民俗誌』（2014年）も、朝鮮学校における女性の経験に着目し、女性が教育実践とエスニック・アイデンティティ形成の中核を担ってきた側面を描き出している。これらの研究は、民族とジェンダーに加え、家族、階層、世代、教育といった視点を重ね合わせることで、朝鮮人女性の経験を多層的に理解するための理論的地平を切り開いてきた²。

第二の領域は、日本の性風俗産業で働く外国人女性、いわゆる「じゃばゆきさん」に焦点を当てた研究である（阿部, 2005; 伊藤, 1992; 笠間, 2002; 鈴木, 1998 他）。阿部（2005年）は、1980年代に急増したフィリピン人女性エンターテイナーをめぐる言説分析を通じて、彼女たちが「感情的」「ホスピタリティ精神に富む」といっ

た性格特性と結びつけられる一方で、「セクシーでエキゾチックな身体」として表象されてきたことを明らかにしている。また、この分野はルポルタージュが多いが、こうしたメディアがむける「まなざし」を分析した大野聖良（2009年）は、日本社会のジェンダーとセクシュアリティに対する「極めて強固な家父長的秩序が働いている」ことを指摘し、「じゃばゆきさん」に投影されるのは「出稼ぎ」「外国人」「女性」に対する日本社会のジェンダーのあり様や排他性である、とその問題の所在を明らかにしている（大野，2009, pp.474-475）。

これらの研究は、外国人女性をめぐる性的搾取の実態と、それを支える家父長的秩序の構造を明らかにしてきた。また、「じゃばゆきさん」の歴史が近代日本の「からゆきさん」と連続する側面を指摘し、国境を越える女性移動と性産業の関係を歴史的視野から捉えてきた（大野，2009; 吉村，2011 他）。そこでは、女性の身体が経済的・帝國的秩序にいかに関わり込まれてきたかが示されている。

しかし、「外国人」女性と「日本人」女性のあいだに存在する権力差や、その差異がいかなる歴史的・政治的文脈のもとで編成されてきたのかについては、十分に検討されてこなかった。とりわけ植民地主義と国民国家体制が結びついたエスニック・ヒエラルキーの構造が問題視されることがなかったことで、外国人女性が「民族化された身体」として性的に意味づけられてきた非対称性は、十分に可視化されてこなかった。だがこの点について、在日外国人をめぐる研究においても、朝鮮人女性やフィリピン人女性の表象は個別事例として検討され、「外国人女性」を横断する構造的視点は限定的であった。

本稿は、こうした研究上の空白に応答するものである。外国人女性の身体が「見られる身体」として編成・再編成されていく過程に注目することで、個別の歴史的事象を貫く視座、すなわち「植民地主義的まなざし」の歴史的連続性に着目する。ここでいう「歴史的連続性」とは、同一言説の単純な反復ではなく、語彙や制度が変化しながらも、他者化・性化・非人間化の構造が再生産されていく歴史的過程のことをいう。網羅的な実証ではなく、歴史的事例を接続することで、植民地主義的まなざしを可視化することを目指す。この意味において、本稿は問題提起としての性格をもつ試論であり、今後の実証研究に向けた視座を提示することを目的とする。

3. 戦前の大衆文化における朝鮮人女性の「見られる身体」—既刊論考にもとづく理論的枠組み

筆者はこれまで、戦前期日本の大衆文化において、朝鮮人女性がどのように

表象され、いかなるかたちで消費されていったのかを検討してきた(李 2024a、2025b)。本節では、それら既刊論文で論じてきた内容を整理することで、本稿全体の問題関心である「植民地主義的まなざし」の歴史的連続性を考察するための出発点として位置づけたい。

まず強調しておきたいのは、戦前期の日本社会において、朝鮮人女性が単に「異国の女性」や「他文化の担い手」として理解されていただけではないという点である。むしろ彼女たちは、民族的差異を可視化する「身体」として強く意識され、その身体が娯楽の対象として組み立てられていった。すなわち、朝鮮人女性は「誰であるか」よりも「どのように見られるか」が先行し、その見られ方自体が文化的・政治的意味を帯びていたのである。

このとき作動していたのが、朝鮮人女性を同時に「女性化」し「民族化」する二重のまなざしであった(李里花 2025b)。「女性化」とは、感情的で、従順で、魅惑的といったジェンダー化された特性を付与することであり、「民族化」とは、個々の人格や社会的条件を捨象し、「朝鮮らしさ」を体現する象徴的存在としてまとめあげる作用を指す。この二つが重なり合うことで、朝鮮人女性の身体は「異国情緒」や「艶やかさ」を帯びた存在として表象され、性的消費へと接続されていった。

重要なのは、こうした表象が、植民地支配を担う政治エリートや一部の男性の享楽に限定されたものではなかったという点である。朝鮮人女性をめぐるこのまなざしは、都市の大衆劇場や興行空間を通じて反復的に提示され、多くの人びとが共有する娯楽体験として定着していった。すなわち、朝鮮人女性の身体は、「見ること」「楽しむこと」の対象として、大衆文化のなかに組み込まれていったのである。

この構造を具体的に示す事例として、筆者がこれまで詳細に検討してきたのが、1930年代に日本の大衆劇場で一世を風靡した裴亀子歌舞劇団である。裴亀子歌舞劇団は、朝鮮人女性や少女たちによって構成され、朝鮮民謡や物語劇に加え、タップダンス、ジャズ演奏、アクロバットといった当時の都市的娯楽を融合させた舞台を展開した。豪華な朝鮮衣装やきらびやかな舞台装置は、観客に「異国的で華やかな空間」を視覚的に提示し、強い訴求力をもって受け止められた。

ここで示されているのは、朝鮮文化がそのまま再現されていたというよりも、観客の視線を引きつけるかたちで再構成されていたという事実である。朝鮮人女性の身体は、衣装、踊り、集団性を通じて強調され、「可憐」「魅惑的」といったイメージのもとで提示された。観客は、その身体を鑑賞し、楽しみ、感情を動かされる存在として位置づけられていたのである。

さらに裴亀子歌舞劇団の舞台では、視覚的スペクタクルだけでなく、感情の動員が重要な役割を果たしていた。華やかなレビューやアクロバットによって観客を高揚させる一方で、朝鮮の民話や哀話をもとにした演目は、涙や哀愁を喚起した。ここで観客は、朝鮮人女性の身体を「見て楽しむ」だけでなく、「同情し、共感する」対象として受け取っていた。しかし、この共感は、朝鮮人女性が語る主体として立ち上がることによって生じたものではない。あらかじめ用意された物語と感情の枠組みの中に、彼女たちの身体を配置することによって成立した世界であった。このような構図は、朝鮮人女性の主体性を拡張するというよりも、観客の感情を満たすための存在として位置づける効果をもっていた。感動や涙を誘う演出は、他者理解の契機となりうる一方で、「語られる存在」「見られる存在」としての位置を固定化する作用を伴っていた。ここに、「植民地主義的まなざし」の重要な特徴がみられる。

加えて、裴亀子歌舞劇団の舞台が成立した背景には、植民地期に再編された「キーセン」表象の影響があった。朝鮮人女性は、キーセンという職業的イメージと重ね合わされることで、「魅惑的な存在」「性的娯楽の担い手」として想像されやすい位置に置かれていた。大衆劇場で朝鮮人女性の舞台を観ることは、現実のキーセン遊びとは異なるかたちで、その雰囲気や感覚を疑似的に体験する機会となった。裴亀子歌舞劇団の舞台は、この意味で「疑似キーセン遊び」として機能し、朝鮮人女性を身近でありながら安全に消費可能な対象として提示していたのである。

とりわけ大衆劇場という空間は、このまなざしを広く社会に浸透させる装置として決定的な役割を果たした。高級な宴席や実際の性風俗に比べ、大衆劇場は比較的安価で反復的に娯楽を提供する場であり、そこで共有された朝鮮人女性像は、特定階層の欲望ではなく、大衆的快楽として定着していった。こうして朝鮮人女性の身体は、民族的差異を帯びたまま、娯楽として、感情の対象として、そして時に性的想像の対象として消費されていったのである。

以上のように、戦前期日本の大衆文化において朝鮮人女性の身体は、称賛や同情といった肯定的感情を伴いながら、「見られる身体」として組織化されていた。そこでは、露骨な排除や暴力ではなく、娯楽や感情の共有という形式を通じて、他者が管理され、位置づけられる植民地主義的支配の論理が作動していた。

重要なのは、この「見られる身体」が、大衆芸能という象徴的空間の内部に閉じた現象ではなかったという点である。戦前期に大衆文化を通じて形成・共有された朝鮮人女性像は、観ること、楽しむこと、感情を動かされることが正当化さ

れた対象として、社会的想像力のなかに定着していった。その結果、朝鮮人女性の身体は、現実の社会関係や政治的文脈から切り離されたまま、消費可能な他者として把握され、植民地主義的まなざしの基盤を形成したのである。

この基盤は、終戦によって植民地支配が終結した後も消滅することはなかった。むしろ、戦前に「見られる身体」へと朝鮮人女性が編成されたことが、戦後の新たな経済的・制度的条件のもとで再編され、より直接的な形で性的消費の回路へと接続されていくことになる。次節では、その代表的な事例として、戦後の「キーセン観光」を取り上げ、「見られる身体」がいかにして商品化され、社会化されていったのかを検討する。

4. 戦後日本社会における性的消費としてのキーセン観光—商品化・社会化・「見られる身体」の再編

戦後日本社会において外国人女性の身体がどのように性的に消費されていったのかを考える上で、「キーセン観光」はきわめて重要な位置を占めている。なぜならそれは、戦前期の大衆文化において形成された「見られる身体」の編成が、戦後の国際関係と観光産業を媒介として、より直接的かつ制度的な形で再構築された現象だからである。

戦前の大衆劇場において朝鮮人女性の身体は、異国情緒や感情の喚起を担う存在として「安全に消費可能な他者」として提示されていたが、戦後においては、そのまなざしが観光商品として組織化され、現実の移動と性的接触を伴う実践へと接続されていく。キーセン観光とは、日本人男性が韓国を訪れ、「キーセン」と呼ばれる女性たちとの宴席や性的接触を主要な目的とする観光形態であり、1960年代から1970年代初頭にかけて拡大した現象である。

この観光形態は、個々の男性の私的欲望の集積として偶発的に成立したものではない。むしろそれは、韓国国家の外貨獲得政策、日本側の旅行産業および企業文化、さらには男性中心の消費文化が交差する地点において制度化された、戦後日本社会における性的消費の回路であった。ここでは、朝鮮人女性の身体は再び、民族的差異を帯びたまま、「見られ、選ばれ、消費される」対象として編成されていくことになる。

「キーセン観光」や「キーセン・パーティ」と言われる買春ツアーに参加した人の数は明らかにされていない。しかし韓国教会女性連合会（1984年）によると、日本人観光客は1964年には約2280人にすぎなかったが、「日韓基本条約」が締結

された1965年には5110人に増加し、1973年には43万6405人に達している。しかも、そのほとんどが男性であったという。観光客数が約60万人に達する1977年においても、「キーセン観光」を目的とした旅行者が相当数存在していたことが報告されている（韓国教会女性連合会編、1984、16）。

キーセン観光の拡大は、旅行会社による計画的な商品化と密接に結びついていた。猪狩章は、「キーセンと遊ぶことを目的にした日本人観光客は…台湾旅行がうまくいかなくなってから激増した。その多くは、旅行代理店の勧誘によるものであろう」と述べている（猪狩、1974、171-172）。さらに沖縄の本土復帰によって、韓国は「次に近い海外旅行地」となり、費用や距離、日本語対応の容易さといった点で、団体旅行や企業接待の目的地として選ばれやすくなった。ここで重要なのは、キーセン観光が「たまたま行ってしまう」ものではなく、旅行商品として計画的に売られたことである。

実際、シン・パクジニョンも、日本側の海外旅行斡旋業者の広告に「『韓国のキーセンパーティー観光団募集』という文言さえ散見される」と述べている（シン、2002、72）。すなわち、性的接触は旅行の副次的要素として暗示されていたのではなく、明示的に観光商品の中核として言語化されていた。ここでは、欲望は個人の内面に自然に生じるものとして想定されるのではなく、広告やツアー、パンフレットを通じてあらかじめ定義され、可視化され、標準化されていたのである。

ここで注目すべきは、当時、売春女性すべてが「キーセン」と呼ばれていたわけではないという点である。主として日本人男性を相手にする女性が「キーセン」と呼ばれ、米軍兵士を相手にする女性が「倭公主」と区別されていた（韓国教会女性連合会編、1984、16；松井、1978、327；朴、2011、326）。この区分は単なる顧客層の違いではなく、日本人男性向けに女性化・民族化されたイメージが、「キーセン」という呼称のもとで再編成されていたことを示している。キーセン観光に反対する私たちの会によれば、男性天国を夢みて「洪水のように押し寄せる」日本人男性が、旅行会社や先に訪問した人からいわれた言葉が次のとおりであることを報告している—「韓国の名人参強精剤を飲み『妓生・パーティー』を楽しまれますか？韓国の中年以上はみんな日本語が理解できるので、言語の障害はありません」（金、1974、pp.4-6）。つまり、戦後のキーセン観光は、帝国期に構築された支配の歴史とそこで形づくられた朝鮮人女性像の延長線上に位置づけられたのである。

この欲望をあたかも一般的で自然なもののように見せかけたのが、男性向け雑誌や旅行ガイドといったメディア文化であった。シン・パクジニョンは、中学生

時代に回し読みした成人向けのイエローマガジンに、ソウルの性売買集結地である弥阿里（ミアリ）の店の風景が、「イラストまで載せて事細かに説明」されていた記憶を記している（シン、2002、72-73）。そこでは、チマ・チョゴリ姿の女性がショーを演じる様子が視覚化され、読者に向けて詳細に物語化されていた。ここで「チマ・チョゴリ」は文化的衣装としてではなく、性的消費を指示する記号として機能している。戦前の大衆劇場においても、豪華な朝鮮衣装は「異国情緒」や「艶」を媒介する視覚装置であったが、戦後の雑誌文化においては、それがより直接的に「買うことのできる性的経験」と収斂していった。

同様に、いわゆる『韓国夜遊び読本』や『ソウル夜遊び読本』のような男性向けガイドは、キーセン遊びを「男だったら一度は行きたい夢の城」として語り、キーセンハウスを「伝統と格式の店」として演出する（『韓国夜遊び読本』、1999、34-35）。そこでは、「ママさんの合図で十人ほどがズラリと並ぶ。全員、チマチョリを着て静かに座っている」と描写され、女性の身体は明確に「選ばれる対象」として配置される（『韓国夜遊び読本』、1999、38）。この描写は、女性を人格をもつ主体としてではなく、陳列された身体、すなわち選択可能な商品として経験する視線を、読者に学習させる役割を果たしている。

この「整列」「選択」という形式は、猪狩章が現地で目撃した光景と直接的につながっている。猪狩は、人手不足になると「街のなかのコールガール組織に声をかけ、チマ・チョゴリを着せて客席に出す」実態を記し、さらに「同じ数のインスタント・キーセンが三列縦隊に並んで旅行者の指示を受けている」場面を描写している（猪狩、1974、173-174）。ここでは、文化衣装の着用は自発的な文化実践ではなく、観光商品の規格として命じられ、女性たちは旅行者の指示によって配置される。このとき「見られる身体」は、象徴的存在ですらなく、供給可能な「数」として管理されている。

さらに重要なのは、キーセン観光が一部の男性の逸脱的行為としてではなく、社会の中で共有された「常識」となっていた点である。シン・パクジニョンは、韓国の高校の授業で教師が「モデル級に背が高くしてスラッとした女が、日本人とホテルにぞろぞろ入っていったぜ」と語った場面を回想し、「私たちはみな、それが『キーセン観光』だということは知っていた」と記している（シン、2002、72）。このエピソードは、買春観光が秘密の行為ではなく、教室という公共空間においても共有可能な語りとなっていた事実を示している。ここでは、誰がその行為をしているのか、女性がどのような状況に置かれているのかは問題化されず、それ

が「すでに知られているもの」「説明を要しないもの」として前提化されている。

以上のように、キーセン観光は、戦後日本社会における外国人女性の身体が、いかに商品化され、視覚化され、社会化されていったのかを示す典型的な事例である。そこでは、朝鮮人女性の身体が、民族的差異を帯びたまま、接待と性的奉仕を担う女性的存在として編成され、「見られ、選ばれ、消費される」対象として制度化されていた。この構造は、戦前の大衆文化において形成された「見られる身体」の編成と断絶するものではない。むしろ、戦前に娯楽として共有された女性化・民族化のまなざしが、戦後には観光と性売買を媒介として、より広範かつ制度的に再編されたものと位置づけることができる。つまり、キーセン観光は、戦後の日韓関係における経済的非対称性と結びつきながら、植民地支配の終結後もなお持続する「植民地主義的まなざし」を、女性の身体を通じて可視化した現象であり、戦後に形を変えて再生産された性的・民族的消費の回路である。

5. 戦後買春観光の再編と〈まなざし〉の拡張 — 韓国クラブ・フィリピンパブへ

残念ながら、戦後の買春観光の文化は、1970年代に終焉を迎えることはなかった。むしろ1980年代以降、その回路は大きく二つの方向へと再編成されていく。一つは、日本国内へと回路を引き戻すかたちで進行した「韓国クラブ」の増加であり、もう一つは、より経済的に脆弱な地域へと買春の対象を移行させるかたちで展開した、タイやフィリピンなどへの買春ツアーの拡大である（吉村, 2011）。

まず前者については、1980年代以降、日本では韓国生まれの女性が来日し、日本人男性や在日コリアン男性をもてなす「韓国クラブ」が都市部を中心に急増した。これは、戦後のキーセン観光によって形成された「韓国的な女性性」や「異国的で従順な身体」というイメージが、日本国内の消費空間へと移植された現象として理解することができる。海外へ出向かずとも、同様の体験が可能になることで、買春の実践は日常化・常態化し、日本社会の内部に組み込まれていった。

一方で同時期、買春観光は日本国内に回収されるだけでなく、その対象地域をさらに経済的に周縁化された国々へと拡張させていった。韓国が経済成長を遂げ、民主化運動が高まりを見せるなかで、韓国社会内部からキーセン観光に対する批判や抵抗が強まったこともあり、日本人男性の買春ツアーは、タイやフィリピンなど、より貧困度が高く、経済格差の大きい地域へと移行していく。そこでは、「安価であること」「従順であること」「日本語や英語による最低限のコミュニケーションが可能であること」といった条件が強調され、女性の身体は観光資源とし

て再び組み立てられていった（『タイ夜遊び読本』, 2000; 『フィリピン夜遊び読本』, 2000）。

このように見ていくと、戦後日本における買春観光の展開は、特定の国や時代に限定された逸脱的現象ではなく、経済格差と男性中心的欲望を基盤とする可動的なシステムであったことが明らかになる。対象となる女性の国籍や民族は変化しても、「安価に消費可能なアジア女性の身体」を求めるまなごし自体は連続しており、そのまなごしが移動し、形を変えながら再生産されてきたのである。

さらに1990年代以降、この〈まなごし〉は韓国人女性にとどまらず、フィリピン女性を中心とするアジア出身女性へと拡張していく。その象徴が、全国各地で急増した「フィリピンバブ」である。フィリピンバブは、大都市圏のみならず、地方都市や温泉街にも広がり、人口流出が進む地域において、若年女性労働力の不足を補う役割を担っていった。2000年時点で、興行ビザを持って日本に滞在していた外国人は5万3847人にのぼり、そのうち4万3790人がフィリピン出身であったことが報告されている（法務省, 2002）。

阿部亮吾（2005）は、フィリピンバブにおける顧客言説の分析を通じて、フィリピン人女性エンターテイナーが「感情的」「ホスピタリティ精神に富む」「エキゾチックでセクシーな身体」として表象されてきたことを明らかにしている。こうした表象は、個々の顧客の偏見にとどまるものではなく、ウェブサイトや雑誌、ガイドブックなどのメディアを通じて流通し、顧客のまなごしを事前に形成する装置として機能していた。

すなわち、キーセン観光から韓国クラブ、そしてタイやフィリピンへの買春ツアーへと続く流れは、植民地主義的欲望と経済的不均衡が結びついた性的消費の構造が、時代や空間を越えて持続してきたことを示している。この構造のなかで、外国人女性の身体は一貫して「見られる身体」として編成され、その尊厳や主体性は後景化されてきたのである。

しかし重要なのは、この「見られる身体」としての消費が、日本社会全体で進行した構造的な労働力不足によって正当化された点である。高度経済成長期からバブル期にかけて、日本では製造業、サービス産業、第一次産業などで慢性的な人手不足が生じ、とりわけ水商売や性産業において「若い女性労働力」の不足が顕著であった。こうした需要に応える形で、日本政府は1990年に入管法を改正し、「外国人」労働者の受け入れを制度的に拡大した。その一つとして導入されたのが「興行」ビザである。

本来、「興行」ビザは歌や踊りなどのエンターテインメントを行う外国人の入国を想定した制度であった。しかし実際には、このビザで来日した女性たちの多くがホステスとして就労し、結果として同制度は性産業を支える就労資格として機能するようになった。この制度運用については、2004年に米国国務省が「人身売買に該当する」として日本政府を批判しており、国家による移民管理と性産業需要の結びつきが国際的にも問題視されている（鳥井, 2020）。

にもかかわらず、日本社会における性的消費の文化は、キーセン観光から韓国クラブ、フィリピンパブへと、対象となる女性の国籍や民族を変えながら拡張してきた。経済的優位に立つ日本社会が、アジアのより貧しい地域の女性たちを「利用可能な他者」として組み込み、「見られる身体」として編成してきた構造そのものは、十分に問い直されてこなかったのである。その結果、国家政策、経済格差、男性中心的文化が交差する地点で生じている女性の移動と労働のリスク（こどもの認知やそれをめぐる日本国籍の取得を含め）は、構造的問題としてではなく、女性個人の問題へと転嫁されることが多かった（Chung 2015年）。

以上から浮かび上がるのは、キーセン観光から韓国クラブ、フィリピンパブへと連なる戦後の回路が、外国人女性を「見られる身体」として再編し続けてきた過程である。そこでは、旅行会社による勧誘や広告を通じた欲望の言語化・標準化、ガイドや雑誌文化による反復的描写、さらには入管制度（興行ビザ）を含む制度的枠組みによる労働移動の組織化が相互に連動し、女性の身体は「民族的差異を帯びたサービス＝性的対象」として社会的に提示されてきた。すなわち、植民地期に大衆娯楽のなかで形成された女性化・民族化のまなざしは、戦後には観光、クラブ文化、移民労働市場を媒介として社会化され、日常的実践として定着していったのである。

重要なのは、この過程が、個々の男性の逸脱的欲望や一部産業の問題としてではなく、「娯楽」「観光」「労働」といった中立的な語彙のもとで正当化されてきた点である。その結果、国家政策、経済格差、男性中心的消費文化が交差する地点で生じている構造的暴力は不可視化され、移動や就労に伴うリスク（男性客との間に生まれた子どもの認知や、その子どもの日本国籍をめぐる問題を含めて）は、一貫して女性個人の側に帰責されてきた。本稿が問い直そうとするのは、まさにこの〈不可視化の仕組み〉そのものである。

6. 結論 — 「見られる身体」の歴史的射程と現代的含意

本稿は、日本社会において外国人女性がいかにして「見られる身体」として編成されてきたのかを、戦前期から戦後期にかけての歴史的連続性のなかで捉え直すことを目的とした試論である。ここでいう「見られる身体」とは、女性が自律的な主体としてではなく、民族性や文化性を体現する身体として可視化され、その身体性や感情性が欲望や不安の投影対象として組織化される状態を指す。本稿は、この概念を手がかりに、戦前大衆文化、戦後の買春観光、そしてその後のクラブ文化へと連なる回路を横断的に検討してきた。

第一に、本稿は、戦前期日本の大衆文化空間において、朝鮮人女性の身体が「女性化」と「民族化」という二重のまなざしのもとで娯楽化され、「見られる身体」を形づくったことに言及した。裴亀子歌舞劇団に代表される舞台表象では、朝鮮人女性の身体は、視覚的スペクタクルと感情動員の装置として配置され、称賛や同情といった肯定的感情を媒介としながら、他者を管理し位置づける植民地主義の支配の論理が作動していた。

第二に、本稿は、この戦前期に形成された「見られる身体」の編成が、戦後において断絶することなく、キーセン観光という形で再編・拡張されたことを示した。戦後のキーセン観光は、個々の男性の逸脱的行為ではなく、国家政策、旅行産業、男性文化が交差する地点において制度化された性的消費の回路であり、朝鮮人女性の身体は民族的差異を帯びたまま商品化され、「見られ、選ばれ、消費される」対象として社会化されていた。この構造は、戦前の大衆文化における娯乐的消費の延長線上に位置づけることができる。

第三に、本稿は、こうした戦後の買春観光の文化が1970年代で終息したのではなく、1980年代以降、日本国内外へと分岐しながら再編成されていった点に注目した。日本国内では韓国クラブが増加し、海外ではタイやフィリピンなど、より経済的に脆弱な地域の女性たちが買春ツアーの対象となった。さらに1990年代以降、フィリピンバブを中心とするアジア女性エンターテイナーの増加は、こうした回路が「国内化」と「海外化」を同時に進行させていたことを示している。阿部（2005）が示したように、フィリピン人女性は「感情的」「ホスピタリティ精神に富む」「エキゾチックでセクシーな身体」として表象され、日本人男性のまなざしを事前に形成する言説空間のなかに位置づけられていた。

本稿が重視したのは、これらの現象を個別の出来事としてではなく、戦前から戦後にかけて連綿と続く「植民地主義的まなざし」の変奏として把握する視角で

ある。表象の形式や言説の語彙は時代ごとに変化しているが、外国人女性を〈見られ、消費され、感情的に管理される身体〉として捉える構造そのものは、形を変えながら再生産されてきた。

最後に、本稿は、こうした歴史的連続性が、現代日本における排外主義やヘイトスピーチと無関係ではない可能性を示唆したい。2000年代以降に顕在化したヘイトデモでは、外国人女性、とりわけ朝鮮人女性に対する性的貶めや威嚇が公然と行われてきた。これらの言動を、同時代の外交的対立や一時的な政治状況の反映としてのみ理解することには限界がある。むしろ、本稿から示唆されるのは、戦前から戦後にかけて蓄積されてきた、外国人女性を〈見られ、消費され、貶めてよい身体〉として捉える植民地主義的まなざしが、現代の排外主義的言説を可能にする想像力の基盤として作用しているのではないか、という問いである。

本稿は、この問いを提示するにとどまり、現代の排外主義やヘイトスピーチそのものを実証的に分析したものではない。その意味で本稿は試論にすぎない。しかし、外国人女性をめぐる差別や暴力を、個別の事件や一時的現象に還元するのではなく、「見られる身体」という概念を通じて歴史的に捉え直すことは、現代社会における排外主義の基底を理解するための重要な理論の手がかりを提供するはずである。

問われているのは、過去において外国人女性がどのように「見られてきたのか」という事実だけではない。むしろ、そうしたまなざしが、どのような制度や語彙、実践を通じて現在まで更新され、私たち自身の日常的な理解や判断の前提として温存されているのか、という点である。「見られる身体」をめぐる歴史を問い直すことは、単なる過去の再検討ではなく、いま私たちが生きている社会が、誰を、どのような位置に置き続けているのかを問い返す作業にほかならない。

〈註〉

- 1 本稿は2024年11月の「東アジアにおけるポストコロニアル研究会」における研究報告をもとに、新たな理論的枠組みを提示しながら、全面的に書きおろした論考である。研究会での報告内容については、李里花2025年を参照してほしい。
- 2 在日朝鮮人女性の歴史は、アカデミアの世界だけでなく、市民活動を通して多くの記録が残されてきた。この意味において、在日朝鮮人女性史の蓄積は草の根の市民活動の成果であるといえる。

参考文献

- ・阿部亮吾(2004). フィリピン人女性エンターテイナーの表象. 『日本地理学会発表要旨集』2004s(日本地理学会春季学術大会), 128. <https://doi.org/10.14866/ajg.2004s.0.128.0>

- ・阿部亮吾 (2005). フィリピン女性エンターテイナーのパフォーマンスをめぐるポリティクス：ミクロ・スケールの地理に着目して. 『地理学評論』, 78 (14), 951-975.
- ・アプロ (2018). 『第2回在日コリアン女性実態調査——生きにくさについてのアンケート (2016年1月～6月)』. アプロ.
- ・熱田敬子・河庚希・梁 (永山) 聡子 (2020). インターセクショナリティに開かれた場のために：ゆる・ふえみカフェとふえみ・ゼミの実践から. 『現代思想』, 48 (4), 147-159.
- ・IMADR 反差別国際運動日本委員会 (2001). 『マイノリティ女性の世界を変える！：マイノリティ女性に対する複合差別』. 解放出版社.
- ・伊藤るり (1992). 「ジャパゆきさん」現象再考：八〇年代日本へのアジア女性流入. 伊豫谷登土翁・梶田孝道 (編), 『外国人労働者論：現状から理論へ』 (pp. 293-332). 弘文堂.
- ・岩崎稔・大川正彦・中野敏男 (編) (2005). 『継続する植民地主義』. 青弓社.
- ・猪狩章 (1974). 『ソウル特派員報告—問い直される日韓関係』. 柘植書房.
- ・大野聖良 (2009). 「ジャパゆきさん」をめぐる言説の多様性と差異化に関する考察. 『人間文化創成科学論叢』, 11, 467-476.
- ・笠間千浪 (2002). ジェンダーからみた移民マイノリティの現在：ニューカマー外国人女性のカテゴリー化と象徴的支配. 宮島喬・梶田孝道 (編), 『国際社会④ マイノリティと社会構造』 (pp. 121-148). 東京大学出版会.
- ・かわさきのハルモニ・ハラポジと結ぶ2000人ネットワーク生活史聞き書き編集委員会 (編) (2009). 『在日コリアン女性 20人の軌跡：国境を越え、私はこうして生きてきた』. 明石書店.
- ・川村湊 (2001). 『妓生：「もの言う花」の文化誌』. 作品社.
- ・キーセン観光に反対する女たちの会 (編) (1974). 『キーセン観光：資料・性侵略を告発する』. キーセン観光に反対する女たちの会.
- ・久田恵 (1989). 『フィリッピーナを愛した男たち』. 文藝春秋.
- ・公益財団法人人権教育啓発推進センター (2016). 『ヘイトスピーチに関する実態調査報告書 (平成27年度法務省委託研究調査事業)』. https://www.moj.go.jp/JINKEN/stophatespeech_chousa.html
- ・金栄・梁澄子 (1988). 『海を渡った朝鮮人海女：房総のチャムスを訪ねて』. 新宿書房.
- ・金東炫 (1974). ルポ, 日本人観光客 (抄訳). キーセン観光に反対する女たちの会 (編), 『キーセン観光：資料・性侵略を告発する』 (pp. 4-6). キーセン観光に反対する女たちの会.
- ・金富子 (2011). 『継続する植民地主義とジェンダー：「国民」概念、女性の身体、記憶と責任』. 世織書房.
- ・徐阿貴 (2012). 『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成：大阪の夜間中学を核とした運動』. 御茶の水書房.
- ・鈴木伸枝 (1998). 首都圏在住のフィリピン人既婚女性に関する一考察. 『ジェンダー研究』, 1, 97-112.
- ・宋連玉 (2023). 『植民地「公娼制」に帝国の性政治をみる：釜山から上海まで』. 有志舎.
- ・Chung, H.-J. (2015). Transnational labor migration in Japan: The case of Korean nightclub hostesses in Osaka. Bulletin of the National Museum of Ethnology, 40 (1), 101-119.
- ・鄭幸子 (2024). フェミニスト・エスニック・スタディーズから人類学への提言. 『文化人類学』, 88 (4), 673-691.
- ・鄭瑛恵 (1997). フェミニズムのなかのレイシズム. 江原由美子・金井淑子 (編), 『ワードマップ・

- フェミニズム』. 新曜社.
- ・鄭瑛惠 (1998). 「戦後」つくられた植民地支配:「在日韓国朝鮮人」からの日本国籍剥奪. 『ナショナリズムを読む』. 情況出版.
 - ・鳥居一平 (2000). 『国家と移民: 外国人労働者と日本の未来』. 集英社新書.
 - ・中島弘象 (2017). 『フィリピンバブ嬢の社会学』. 新潮新書.
 - ・橋本みゆき (編著)・猿橋順子・高正子・柳蓮淑 (著) (2021). 『二世に聴く在日コリアンの生活文化: 「継承」の語り』. 社会評論社.
 - ・朴宜美 (2011). 70年代の韓国と日本におけるキーセン観光反対運動: 韓日女性運動史における「70年代」の意義. 『日本研究 (高麗大学グローバル日本研究院)』, 16, 325-349.
 - ・朴金優綺 (2019). 現代日本における「上下」からの差別と排外主義. 木村朗・前田朗 (編), 『ヘイト・クライムと植民地主義: 反差別と自己決定権のために』. 三一書房.
 - ・原尻英樹 (1997). 『日本定住コリアンの日常と生活: 文化人類学的アプローチ』. 明石書店.
 - ・原尻英樹 (1998). 『「在日」としてのコリアン』. 講談社現代新書.
 - ・山下英愛 (1997). 朝鮮における公娼制度と日本. 林玲子・柳田節子 (監修), 『アジア女性史国際シンポジウム実行委員会 (編), 『アジア女性史: 比較史の試み』 (pp. 406-413). 明石書店.
 - ・梁英聖 (2016). 『日本型ヘイトスピーチとは何か: 社会を破壊するレイシズムの登場』. 影書房.
 - ・梁英聖 (2020). 『レイシズムとは何か』. 筑摩書房 (ちくま新書).
 - ・李杏理 (2022). 在日朝鮮人女性にとっての交差性・複合差別を考えること. 『部落解放』, 830, 37-47.
 - ・李信恵・上瀧浩子 (2018). 『# 黙らない女たち: インターネット上のヘイトスピーチ・複合差別と裁判で闘う』. かもがわ出版.
 - ・李里花 (2020). 今なぜ「トランスナショナル」なのか: 日本における移民研究を考える. 『移民研究年報』, 26, 3-8.
 - ・李里花 (編著) (2021). 『朝鮮籍とは何か: トランスナショナルの視点から』. 明石書店.
 - ・李里花 (2024a). チマ・チョゴリのイメージをめぐる日韓の歴史: 支配から連帯へ. 公益財団法人 JFE21 世紀財団 『アジア歴史研究報告書』.
 - ・李里花 (編著) (2024b). 『アジア系アメリカを知るための53章』. 明石書店.
 - ・李里花 (2025a). Les Coréens Chōsen-seki au Japon: Une inclusion sous conditions (Chōsen-seki Zainichi Koreans: Conditional Inclusion). 『Migrations Soci-tê』, 37 (200) , 77-94.
 - ・李里花 (2025b). 「元祖韓流スター」裴亀子歌舞劇団—戦前の日本における大衆文化と朝鮮人女性のイメージ. 李里花 (編), 『日韓スタディーズ 2: 「日韓」を超えて—文化と境界の交差』. ナカニシヤ出版.

資料

- ・法務省 (2000). 国籍 (出身) 別在留資格 (在留目的) 別外国人登録者. <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files-page=1&toukei=00250012> (2022年9月5日閲覧) フォームの始まりフォームの終わり
- ・1999 『韓国夜遊び読本: 激しく、優しいアガシたちの国を潜入レポート』 プレジャー・パブリッシング
- ・2000 『タイ夜遊び読本: 現地ナマ潜入最新情報満載』 プレジャー・パブリッシング
- ・2000 『フィリピン夜遊び読本』 プレジャー・パブリッシング
- ・2002 『ソウル夜遊び読本』 プレジャー・パブリッシング